

繼父業、

〔日本醫道沿革考〕亮按ズルニ○中明和中ニ至リ、垣本鍼源ナル者アリ、又刺絡ニ精シキヲ以テ、名ヲ京師ニ顯ス○中恒ニ曰ク、鍼鍼ハ、皮肉ヲ刺ス、甚ダ利ニシテ、氣血ヲ傷ラズ、我技從前鍼家ノ妄ヲ破ルニ足ルト、因テ鍼灸復古ヲ唱フ、世之ヲ目シテ古方鍼ト云フ、

〔杏林雜話〕淺井圖南才氣敏慧、廣綜衆藝、畫竹最有風致、時宮崎筠圃、御園意濟、山科宗庵亦以墨竹鳴、世稱平安四竹、御園意濟一作齋京師人、善醫、最精鍼術、一日西本願寺主嬰兒、俄然啼泣不止、遽延衆醫、醫皆以爲病、投藥無効、意濟後至診曰、此兒無病、必有他故、乃脫襁褓視之、果有疎、匝啄股間、急手捉去、啼泣頓止、一坐駭歎、

〔春雨樓叢書十二〕奇病并鍼術

廣瀬伯鱗は放薦にして、鍼術を業とし、予が方へも來りし事あり、口并兩手雙足に鍼をはさみ、一度に人に施す故、吉原町などにても、五鍼先生といへる由、彼もの、安藤霜臺の方へ來りし時、同人祐筆何某を見て、御身御不快なる哉と尋けるに、不快なりと答ふ、暫くありて、總身汗を流し、面色土の如く成りし、伯鱗是を見て、肩へ一鍼を下しければ、うんといふて氣絶せしを、足の爪先へ又一鍼下し、息を返し、夫より一兩日療治し、快氣しけるが、伯鱗教示しけるは御身來年今頃用心し玉へ、又かゝる病氣あるべし、其時療治せば、命恙なしと語りしが、翌年にいたり、其身も忘れけるにや、霜臺の元を暇を乞ふて、神樂坂邊武家に勤けるが、果して翌年其頃同病にて病死しぬ、

〔元治元年武鑑〕御鍼科二百儀高 御番料百儀

吉田秀貞 杉枝仙貞

〔治療之大概集〕三部書序○中

鍼灸ノ法、世ニ行ル、既ニ尙シ、素靈、甲乙、千金、外臺、降リテ、銅人鍼灸圖、明堂鍼灸經、徐氏鍼灸經、資生經、神灸聚英、神應經、十四經ノ類、其書枚舉スベカラズ、驗バ書籍ハ規矩ナリ、術ハ運用ナリ、精聰